

令和7年度 第3回大東市産業振興市民会議（報告）

1. 日時・場所 令和7年10月6日（月）午後3時00分～5時30分

大東市役所 厚生棟A会議室

2. 出欠（敬称略）

【出席】

大阪産業大学 社会連携・研究推進センター長 国際学部国際学科 教授	中山 英治
大阪公立大学 商学部 教授	本多 哲夫
(株)山田製作所 代表取締役	山田 茂
新大阪食品産業(株) 代表取締役	北尻 正太
NPO法人住まいみまもりたい 理事長	吉村 悦子
NPO法人大東夢づくりコミュニティ 代表理事	中村 朋子
大東商工会議所 常議員 (株)ウチダ 代表取締役	内田 祥嗣
近畿経済産業局 総務企画部中小企業政策調査課長	阿瀬 太

大東市 産業・文化部長 田中 知子

事務局 産業経済室 杉谷総括次長・椎葉課長・林上席主査・田上

【欠席】

明星シンセティック(株) 代表取締役	上田 隆章
大東市商業連合会 会長 JILLS	角谷 昌寛
小金屋食品(株) 代表取締役	吉田 恵美子
アッセンブル産業(株) 代表取締役	竹原 清司

3. 山田会長挨拶

遅ればせながら映画「国宝」を見てきた。血の繋がっている者と繋がっていない者、どちらが継ぐかという歌舞伎の話。時代がテンポよく移り変わっていき、どちらが主役かどうかというのも変わっていくのが良かった。歌舞伎の演技もとても練習したのが伝わってきた。歌舞伎の世襲ということと自分自身が2代目の経営者ということに思いをはせながら鑑賞した。今回の会議も10年後の大東市の産業振興に思いをはせながら活発な議論をお願いしたい。

4. 先進的な取組を行っている他市事例について

（事務局より資料1～資料10について説明）

- ・前回の会議において、昨年策定された基本指針の達成に向けて、「部会」や「ワーキンググループ」等の下部組織が必要ではないかのご意見をいただいた。また、先進的な取り組みを実施している田川市への視察も必要ではないかというご意見もいただいた。
- ・事務局として視察等の費用に関する調整を行ったが、年度内での予算確保は難しいとの結果となった。

そのため、令和 8 年度における田川市への視察費等の予算要求を進めることと並行して、事務局として田川市の産業振興会議について調査を実施した。また、次回の会議において、田川市の産業振興会議の所属委員様に対して、オンライン会議を予定している。

- ・田川市は産業振興会議の下部組織として、実務責任者会議を設けており、その役割は産業振興会議で決定された方針やビジョンに基づく企画・立案を行い、実際の活動へとつなげていく機関である。また、ビジョン実現のために、令和 5 年に一般社団法人「たがわ地域経済活性化センター」を設立し、同年に田川市との連携協定を締結している。
- ・さらに、その下の部会は実務責任者会議を中心にメンバーを集め、ビジョン実現のために実際に活動を行っている組織である。部会では「学びの場の開設」「ソーシャルビジネスの推進」「プラットフォームの構築」「地域に若者を残す活動」といった 4 グループに分かれて、それぞれのテーマに対する具体的な取組を進めている。
- ・多くの市町村の産業振興会議では、会議で決定した内容を市に提言し、その中で市が事業を実施することが一般的だが、田川市では部会自体が直接事業を実施することができるため、よりスピーディーに行動に移ることが可能であるという特徴がある。
- ・田川市の実務責任者会議はほぼ毎月開催されており、部会の活動を直接推進するため、具体的な事業実施が行いやすくなっている。
- ・田川市の産業振興会議は同友会を中心に活動を行っている。また、振興条例の目的が中小企業を守るためのものではなく、「地域の人があつまり」「企業もまちも元気になるためにはどうすればよいのか」を考え、参加者全員が主体性をもって取り組むことを心がけているように感じた。地域の課題を自社の課題ととらえ、地域の方針を自社の経営方針と合わせて、地域の困りごとを解決するところで生活者の暮らしを便利にし、ひいては産業振興につながるという考えをもって振興会議を進めているように感じた。
- ・部会は完全に自主的なグループとして存在しており、市からの報酬等は発生していない。また、事務局である田川市担当者に確認したところ、現在は部会の活動に対して市が大きく関わることは無く、開催等に関しても部会の自主性に任せているとの回答だった。
- ・東大阪市では「モノづくり部会」「労働雇用部会」「商業部会」という 3 つの部会が設置されている。部会は、振興会議内で施策の実施や中小企業の振興に関する重要事項の決定を行うため、特に専門的な知識を持つ方々が集まることで、質の高い提言を行うことを目的としている。これは田川市でいう施策の実施に関する部会とは異なり、産業振興施策に関して市への提言を行う位置づけとなっている。
- ・部会では、市内企業向けのアンケートに関する討議や、各種施策実現のための議論などが行われており、本多委員も部会の委員として参加されている。

(本多委員)

- ・「モノづくり部会」ではアンケートや東大阪市内の中小企業への聞き取りで実態を調査し、それを基に新たな提言や以前あげた提言の修正について議論している。アンケートの内容は東大阪市が商工会議所に委託し、商工会議所が作ったたたき台をモノづくり部会の委員で議論して決定した。

(山田会長)

- ・田川市のたがわ地域経済活性化センターについて、もう少し詳細を教えてください。

(事務局)

- ・たがわ地域経済活性化センターの参画企業は産業振興会議の委員が多く参画している。ビジョン実現のために企業・市民・経済団体・行政が有機的なつながりを持つにはどうしたら良いかが産業振興会議の中で議論があり、一般社団法人として設立された。

(会長)

- ・産業振興会議と実務責任者会議のどちらが旗振り役となって一般社団法人を設立するに至ったのか。

(事務局)

- ・そこはヒアリングできていない。

(吉村副会長)

- ・たがわ地域経済活性化センターはどこかの場所に常設で設置されているのか。職員は常勤で配置されているのか。

(山田会長)

- ・資料6に記載されている第4部会の高校生の新しいキャリア教育が令和4年11月に始まり、そこで盛り上がったから翌年に一般社団法人を設立したのかもしれない。実務責任者会議の会長がセンターの理事長になっている。その理事長は同友会のメンバーで、今は全国協議会の幹事長をしている方。

(事務局)

- ・次回のオンライン会議は、産業振興会議会長の中山氏、実務責任者会議委員長の荒川氏、産業振興課長の3名が出席予定。

(山田会長)

- ・東大阪府中小企業振興会議は資料8にあるように年2回の開催だが、田川市はどうなのか。

(事務局)

- ・実務責任者会議は毎月開催している。部会も当初は毎月開催されていたが、現在は以前より開催頻度が減っているが、それでもかなりの頻度で開催されていると聞いている。
- ・実務責任者会議は平成29年では10回の開催、令和6年度で役員会も含むと16回の開催となっている。

(山田会長)

- ・令和2年1月に部会が設置されてから、令和4年11月に第4部会の事業が行われ、令和6年4月に第1部会、第3部会、令和7年8月に第2部会の事業が行われている。5年くらいかけてじわじわと広がっていったそのプロセスを聞いてみたい。

(内田委員)

- ・田川市は大東市よりも人口が少ない（約 44,000 人）が小さいからこそ集まりやすいという事もあるのかもしれない。私は隣の宮若市でも事業をしているが、この辺の地域は自動車産業が盛んで、私以外にも他県から進出した企業がいるが、規模も大きいので中小企業振興会などには参加していないと思う。ただ、このあたりの地域は小さな集まりが多くある印象があり、筑豊地区の集まりもあるので、そうした小さなコミュニティの中でパワーのある方が引っ張っていったって活性化しているのではないか。

(事務局)

- ・2021年の経済センサスでは企業数（個人事業主を含む）は大東市が3,167社に対し、田川市が1,697社で約半数となっている。事業所数でも大東市4,208事業所、田川市が2,219事業所となっている。

(北尻委員)

- ・ワクワクしている。実務責任者会議のメンバーを見ると、最初にこれらの人たちが集まってどのような立ち上がり方をしたのか聞いてみたい。

(山田会長)

- ・私たちも基本指針で四本の柱を立てたが、既にまちゼミや morineki、緑風館高校のインタビューシップ、中学校のキャリア教育学習など、既に取り組んでいるものもある。間違っはいけないのは既にあるものをゼロにして新たに実務者を考えるのではなく、既に取り組んでいる人たちと何のために取り組んでいるのかを話し合い、協働していくことが重要である。

(中山委員)

- ・たがわ地域経済活性化センターの事業内容の中心は第3部会の「KIBITTE」の運用と理解した。「KIBITTE」の中身としては事業者と地域で色々な問題を抱える市民をつなぐ役割が一番中心的な仕事に見える。我々が取りまとめた四つの柱も地域の様々な課題を集約したもので、大東市も具体的な課題が見えている段階で、それをどう事業に結び付けていくか、また解決していくための人を見つけるのかという話になってくると、類似するポイントを田川市から拾っていくと大東市も近いところまで来ていると思う。
- ・たがわ地域経済活性化センターは、前回の会議で山田会長が地域の困りごと事業化し、産業の分野に引っ張っていくことが重要だと言っていた点に結びつくと思う。

(阿瀬委員)

- ・東大阪市の中小企業振興会議の場合は、部会に各委員が数人ずつ分かれて入り、そこに専門家が入っている。田川市の実務責任者会議はどうか。

(事務局)

- ・田川市の場合は、委員の方がそのまま入っている場合や、実務を担っている担当者が入っている場合もあると聞いている。

(阿瀬委員)

- ・田川市のように一般社団法人のような組織を作った方が上手くいくのか、既に動いている方を中心にそれを補強していく形で部会を作っていくのか検討を進めていかないといけない。

(山田会長)

- ・我々も10年先まで産業を活性化させるために、田川市の事を丸々真似るのではなく、なぜ上手くいったのか、なぜ上手く部会が立ち上がったのかなどを次の会議で聞いていく予定である。

(中村委員)

- ・紙の資料だけでは伝わらない実際の温度感を聞いてみたい。

(山田会長)

- ・資料5に取り組んでいる事例があるが、我々の場合も一回だけの取組で終わるのではなく、継続して取り組んでいかないといけない。継続していくことでじわじわと変化が生まれていく。

(北尻委員)

- ・もしかすると田川市の人たちと我々とは、このままでは地域がなくなってしまうという危機感が全然違うのではないかと。自主的に行われていると言っていたが、やらざるを得ない状況なのでは。

(中村委員)

- ・資料5に商店街イベントを実施とあるが、具体的にどんなイベントだったのかなど、実施後商店街がどうなったのかなど、踏み込んで聞いてみたい。変化が目に見えれば継続していくモチベーションにもなる。

(山田会長)

- ・大阪府の大学生が卒業した後、大阪で働いているのは半分程度ではないか。それでも大阪は危機感が足りていない。

(阿瀬委員)

- ・大阪の他の自治体と比べるのではなく、他の県の市町村で比較すると、大東市はまとまっているし人口は集中している。他の市町村では道が無いので山一つ迂回しなければならない例もあることを考えれば大東市はとても便利だと思う。人口もピークの平成10年頃の13万人くらいから現在11万人くらいまで減少したが、もしかすると適正なのかも分からないが、多すぎても窮屈。田川市は10万人から4万人にまで半分以下に減少しており、まちがなくなるという危機感が違う。大東市は地理的にも恵まれているので強みは多くあると思う。そうは言っても競争なので、市民から盛り上げていくという活動は

大事だと思う。

(中村委員)

- ・大東市は小さなビジネスは盛り上がりやすいという土壌はあると思う。若い世代や女性が小さなビジネスから起業しやすい環境なのではないか。

(中山委員)

- ・小さな起業がしやすいという事が大東市の強みなのであれば、それを四つの柱のどれかに紐づけて若い世代に向けての発信につなげてはどうか。もしも部会のどこか一つに特化して最初は実働部隊を動かしていくのであればよい手法かもしれない。

(中村委員)

- ・まちゼミに参加したことがきっかけで起業につながった事例や、大東市の夢をかなえる起業応援補助金を申請して起業する事例もある。

(事務局)

- ・他市でも起業の補助金はあるが、本市の補助金は用途を制限せず 10 万円の補助をしている点で使いやすいという声もいただいている。令和 6 年度は 32 件で令和元年度から徐々に申請件数は増えている。令和 7 年度は 15 件中 11 件が女性の申請で、美容関係やデザイン関係の申請が多い。

(中山委員)

- ・大東市は東大阪市に引けを取らないものづくりのまちというイメージがあり、そういった取組は勧めてきた。ただ、ちょうど今小さな起業が立ち上がってきている頃合いなのであれば、変に対立構造にするのではなく、お互いに支えあえるような土壌もあるという新たなストーリーに落とし込められれば非常に魅力的な話に感じる。

(吉村副会長)

- ・野崎参道商店街の活性化について大阪産業大学の先生やゼミ生と取り組んでいたが、先生が退職された。また、経営学部の先生と新たに取組ができればと思う。

(中山委員)

- ・現在もゼミ単位で地域との取組は進めており、大学としても拡大していきたいと考えているが、最終的には先生の授業との兼ね合いで調整する必要があり、継続性という点で困難な部分がある。

(山田会長)

- ・田川市の第 1 部会の活動内容に市内中小企業の経営理念・ビジョンの作成をサポートとあるが、理想は一方通行の学びではなく、経営理念・ビジョンの作成後に同期会が生まれ、毎年決算書と中期計画書を持ち寄って見せあえる仲になる、そんなグループが大東市内に多く生まれればお互いの経営談義を

話し合い学びあえる場になる。

(本多委員)

- KIBITTE は、TikTok や Instagram、YouTube など情報発信に力を入れていると感じる。KIBITTE は方言なのか。田川市の人には繋ぐという意味で伝わる言葉なのかと思う。また、発信や中高生や大学生などの若者に意識を向けていると感じる。背景には人手不足や人材獲得などの課題があるのかと思う。

(事務局)

- きびってるという方言があり、くくる、繋ぐ、結ぶという意味がある。

(吉村副会長)

- 今回の会議で出た質問項目をまとめて一覧にして、オンライン会議までに共有してほしい。

5. 次回開催日

令和8年1月30日（金）15時～